

黒岩 女性のことで言うと、河野裕子さんが出たころ、家庭の生活がどうしたとか、夫がいて子どもが生まれて何とかで、夫に飯を食わせて送り出すことの幸せがなんで悪いのかと歌っていたところに、その下の世代が「あなたの言い方は古いよ」みたいなことを言い出したが、俵さんはまた元の女性の世界に戻しちゃうみたいなのところがあつて。

幸綱 その意味で、河野裕子さんの短歌に有利な方に時代が動いた、空気がね。アツという間の現象だった。

黒岩 興味深かったですね。今だから言えることですけど。

幸綱 いや、今だから見える。

黒岩 そういうことです。あのときはよくわかつてなかったけど。

大野 佐藤通雅さんが「(当時の) 三十代の彼女たちが歯をくいしばってやってきたことを、いつべんに飛び越してしまった」(『現代短歌月評』、角川「短歌」八六年七月号)と書いていました。しかし、確かに歌壇での着目度は減少しましたが、論破されたわけではないのですから。

幸綱 風向きが変わったという感じだったね。

加古 自然体の強み。

黒岩 また面白いのは、万智ちゃんはそのにアンチテーゼとか、楔を打ち込もうと思つてやったわけじゃなくて、自分の世界を作つたら、世界が自然に変わっちゃったというか。

高山 同じ女性として森屋さんはどうですか。

森屋 完全に俵さんの社会的ブームに乗つかった、まさにその時代だったので、そのころは歌壇のこととかはわからず、ただ、俵さんの歌を……

黒岩 俵さんの『サラダ記念日』は読んでいたんですね。

森屋 (私のスタートは)そこからです。なので、今おっしゃった歌壇の内側の話は全く知らずに、一読者として受け入れた。私もあのすごい旋風の中に入って、そこからという感じでした。

加古 森屋さんはまさに同世代ですね。

森屋 俵さんと同年代です。

幸綱 話がだいぶ飛んじゃつてるね。『サ

ラダ記念日』が出たのは八七年だ。

▽富士田元彦氏の雁書館(七七年設立)

高山 じゃ、戻りましょう。

奥田 このころ、「現代短歌雁」の創刊がありますし、『現代短歌全集』第十五巻が筑摩書房から出ました(一九八一年)。

幸綱 筑摩書房の『現代短歌全集』は画期的だった。今でもこれがいちばん信頼できるテキストです。十人だったかな、編集委員が全員集まって、二回くらい企画会議をやりました。関西の塚本邦雄さんもいたし、かなり忙しいメンバーが全員出席して、午前中からかなり時間をかけた。

黒岩 これは、どの歌集を取り上げるかが勝負なわけですね。

幸綱 そうです。基本的には一人一冊だけど、何人かは二冊入っている。それを誰にするか。どの歌集にするかとか。歌人のランク、歌集のランクにかかわるので、かなり大変だった。たしか文京区本郷の旅館で編集会議をやったと思います。大掛かりな、歌壇史に残る大事な仕事だった。

大野 これがスタンダードになったわけで